

# ドナウ通信

No. 44

## 目次

### 特集 私のハンガリー

過去と未来を償い終わりぬ	糸見 偲	2
ハンガリーの暮らし	本田 宏子	5
ブダペストの生活	小田 和子	7
ハンガリー生活と私	園部 瑞恵	8
明るい未来に向かって	秦 真弓	10
私のハンガリー	大杉 千恵子	12
わらべの会	柴田 幸代	14
スキューバダイビングの世界		
- 水深30mでの出来事	江田 昌宏	17
私とハンガリー	菱木 勤治	22
掲示板		23
20世紀を創ったハンガリー列伝（その一）		
「セント-ジョルジィ・アルベルト」マルクス・ジョルジュ		24
日本人会よりお知らせ		32

昨年発行されました『ドナウ通信 創刊十周年記念号』所収の糸見さんの随想が、日本エッセイストクラブ（文芸春秋社）募集のエッセイ集に受賞収録されることが決定されました。ここにお知らせするとともに、再録してお祝い申し上げます。

このエッセイは、七月末刊の二千年版ベストエッセイ集『日本語の心』文芸春秋社に収録される予定です。

## 過去と未来を償い終わりぬ

糸見 偲

十年一昔というけれど、三昔、四昔という云い方はあるのだろうか。兎も角、私とハンガリーとの付き合いは、小さな数字では云えないほど古くから始まっている。まさか、こんなに長く一つの国に執着するとは

思ってもみなかった。

熱し易く冷め易い私の性格を知っている家族や友人たちは、一年も経たぬ内にハンガリー熱は治まって帰って来ると思っていたらしいが、とうとう三十年以上も過ごしてしまっただ。そして、いつの間にか人生の半分以上を異国で過ごし、そこを「私の家」と呼ぶようになった。私の心をこんなにも強く縛りつけたハンガリーと云う国は一体何なんだろうと、最近、この事を良く思う。

一九六四年、私は生まれて初めてハンガリーの地を踏んだ。何の予備知識も無く、かろうじてリストの名前と五六年のブダペスト動乱の事件が少しだけ頭の中にあっただ。はなやかなパリの生活に慣れていた私にはブダペストの町は暗く貧しく、心寒かった。

当時、私は映画ペンクラブの会員として、フリーで雑誌や新聞に映画評論やスターの話題などを書いてい

た。女性の映画評論家は数少なかったが、殆どが英語圏のフィルム専攻で、私はただ一人のフランス映画派の様だった気がする。六十年代は日本の生活にもゆとりができ、娯楽として映画がもて囃されていた。二本立て、三本立てで上演されて、映画は作っても作っても人が入った。日本映画のみならず、外国映画も同時に最盛期を迎えていた。はなやかなスター達が日本を訪れ、その都度、日本中が沸いた。私もフランスのスター達に会い、インタビューを通して友情の輪が広がった。

たくさんの知人のなかで、とくに影響を受けた人が一人いる。フランソワ・トリュフォー監督である。新しい波（ヌベル・ヴァーグ）の旗い手で、フランスのアカデミックな映画界にシャブローやゴダール達と共に一石を投じて新しい波を起こした活動家。カンヌ映画祭にバリケード

を作つて、映画祭を粉砕した事は有名である。

元来、映画は小説が有つて、それを脚本家がシナリオに直し、監督が映画に思うと思つていたが、原作、シナリオ、監督を全て一人ですると云う事を聞いて驚いた。時にはプロデューサーも兼ねて、安い制作費で自分の考えを映画にすると云うやり方は新鮮だつた。今でこそ、映画はお金さえ集めれば誰でも簡単に作れるようになったが、昔は映画監督になるには徒弟制度みたいなものがあるが、なかなか一人立ちはできなかった。色んな部門に大御所的な存在が居て、自分の思うようには進めなかつた。そんな古めかしい主義を打破したのが、トリュフォー達だったのである。

彼から色んな事を教わつた。映画に対する姿勢。映画は民衆のための娯楽の一つと思つていた私に映画で社会を変える事ができる、国をも変

えることが出来ると教わつた。そしてこの考えが後に現在の夫に会わせ、私の人生を大きく左右して行つたのである。

ハンガリー行きはトリュフォーに云われて、実現した。「東欧の映画は面白いよ。チェコ、ハンガリーの映画を見てごらん」と彼は云つた。ハンガリーの最初の印象は余りに見すばらしく、もの悲しく、たいへんな所へ来てしまつたと云うのが本音だつた。遠来の客である私を精いっぱいもてなしてくれる人達の親切が、かえつて億劫な位、私は西欧カブレしていた様だ。今振り返つてその当時の事を思うと、穴があつたら入りたい位、恥ずかしい心境になる。

ロイヤル・ホテルと云う外国人専用のホテルが一つだけあつて、フンガロフィルムの特別ゲストとして、そこに三日間逗留した。三日の間、色んな映画を見せてもらった。殆どの映画がモノクロで、ヒューマニズ

ムと四つに組んだものが多かつた。一日中、たくさんのフィルムを見て、ふらふらの頭でホテルの部屋に帰る。なかなか寝つかれないのでラジオを付けてみる。今まで聞いた事もない言葉が出て来る。何を云つているのだらうと必死に聞くが、一つも判る言葉がない。ラジオを切つた。しかし、道路からの音も、廊下を渡る人の足音も何もしない。静まり返つた部屋は却つて不気味で、人寂しさの余り、またラジオを付けた。ひと声、ふた声、喋りがあつて、もの悲しいメロデーが流れて来た。そして、だんだんドラマティックになつていつて私の耳を刺激した。ハツと思つた時、曲は終わつてラジオもブツンと途切れた。それからブーと云う電波の音が流れてくるだけ。その夜は妙に息苦しくて、暫く寝つかれなかつたのを覚えてゐる。一九六四年のまだ肌寒い春のことであつた。

そして半年後、私は東京の国立競

技場にいた。そこでまたあのメロデーと出会った。東京オリンピックのサッカーで、見事、ハンガリーが優勝し、この曲が流れ、私はそれがハンガリーの国歌と知った。

仲良くなつたバスケットボールの選手達を家に招待した時、ハンガリーの国歌を歌ってくれるように頼んだ。その時、彼らは直立しないと歌えないと云つたので、舞台でも作るうかと私は笑つた。歌い終わった時、彼等はみんな泣いていた。私も云うに云われぬ不思議な感情の高ぶりを覚えた。

神よ悦びと富を持つて

マジヤール人を祝福し給え

.....

不幸に追はるこの民に

喜びの年を与え給え

.....

もはやこの民は過去と未来を

償い終わらぬ

未来まで償い終わったと云うのはどう云うことなのか。どんな不幸を背負つて来た民と云うのだろうか。考えれば考える程に、私は一步一步ハンガリーに填つていった。

ハンガリー映画は率先して見る様になり、ハンガリーの歴史に興味を持った。六七年、カンヌ映画祭で特別監督賞を受けた監督とインタビュ―がきっかけで知り合い、七二年十一月、彼と結婚した。

その後、映画一筋だった夫は八八年に政治に新しい波を起こすべく政界に入った。「もう一人の他人（ひと）」と云うブダペストの動乱をテーマにした夫の最後の作品が人々の意識改革をし、血を流さずにして共産主義を崩壊させた。八八年から八九年は私達夫婦にとって激動の一年だった。権力に立ち向かうにあたって夫が真っ先に考えていた事は二度と五六年を繰り返さないと云うことで

あった。彼はブダペストの動乱の年に高校生で、沢山の友達を亡くしていた。その史実を基にして作ったのが「もう一人の他人（ひと）」なのである。

彼と行動を共にしている間、「映画はただの娯楽にあらず」と云つたトリュフォー監督の言葉を思い出していた。もしあの時、ハンガリーの国歌を聞かなかつたら、私は今、何処に居るのだろうか。ふと耳に留めたあの曲が、私の心をゆさぶり続けるかぎり、きっと私は静かに年老いていかないと思う。

## ハンガリーの暮らし

本田 宏子

ハンガリーに来て二年余、この地でお世話になった方々を送る機会が増え、自分の帰国日がいつ来るか気になるようになってきた。いつまでもブダペストで暮らしたい気持ちだが非現実的である。何がそうさせるのか私のハンガリー生活を思い起こしてみたい。

現時点で一番足繁く通ったお気に入りの場所は、カフェではゲレルトホテルの一階であり、市場はモスクワテール近くである。回数では語学学校もいい勝負である。そしてバルトーク博物館やリスト博物館など。理由は、心地良く手頃な値段のカフェであり、新鮮でおいしい卵や野菜が手に入ることであり、先生の教え方がいいこと、質の良い他では聞けない内容のコンサートがあるとい

うことなのだが、それ以上に、いつ行っても同じ人が笑顔で迎えてくれることは（お客さん相手のサービスを割り引いても）異国に住む外人としての私の生活を、何よりも豊かにしてくれた。二人暮らしでは、一日晩まで誰とも話をしない日もあり得るが、そんな日常で例えば市場に行き、いつもと同じ卵屋のおばあちゃんと話を交わす時、「ハンガリーに来てよかった」と思うのだった。

日本での私の生活では、対面での日々の買い物をする機会はまずなかった。そう言えばブダペストは寂しさを感じさせなかった気がする。言い尽くされた言葉だが、人とのふれ合いの大切さを思い出させてくれた。初めてゲレルトのカフェに行ったのはここに来てすぐだった。当時は郊外に CORA が一件あるくらいだったから、よく中央市場を覗きに行きた。到着してすぐの二月は寒く外を歩くのも辛く、さらに地理が不案内

な私は街のホテルを目標に歩いていった。学生時代、ホテルは道路と同じ。誰が通りがかってもいい」と聞いて以来、特に外国では何かと利用する。ホテルには必ずカフェがあり電話もある。外人もいる。そこで中央市場の川向かいのゲレルトホテルに行くことが多くなった。次第に長居もできようになり、手紙を書いたり資料を読んだり。今はカフェに行くことが目的になりつつある。忘れ物をトラムの乗り場まで届けてもらった。友人と話したり、新しい友人と知り合ったり。このカフェにはブダペストの思い出が詰まっている。

ハンガリーにまつわり知り合った人々は大勢いる。こちらに来る直前図書館で偶然手にした書籍の著者の先生とは、ブダペストでお目にかかり、学問上それ以外も色々な話が聞けた。以前ハンガリーに住んでいたその先生は、なかなか思うように事が進まず焦っていた私に「住んでい

る時は日々の雑事に追われ何もできないが、日本に帰ったらすつきりまとまるから焦るな」という趣旨のアドバイスをくださった。この言葉は事ある毎に思い出す。「ここでは人と接する機会をつくることに専念するのが大事」という助言は今後のハンガリー生活の課題とも言える。

ハンガリー語学校で一緒だった今は帰国したアメリカ人の陶芸家との出会い。彼女はいつもハンガリー語会話を心がけていたのが印象的だ。彼女はハンガリーの陶芸家の作品を集めた写真集を出版した(Carolyn M. Baridos, Earthen Wonder Hungarian Ceramics Today, Lake House Books, 2000)。彼女には、出版記念パーティや義父である音楽家の演奏会他色々なハンガリーを見せてもらった。会う度に彼女の前向きな姿勢に触れ、刺激を受ける。私のハンガリー生活で忘れてはいけないのは、こちらに来る直前に知り合った、日本に住むハンガリー人

の友人の心遣いである。私の知人が偶然紹介してくれたのだが、冬の寒い時期会いに行った私に「いざという時に役立つ情報」をくれた。ハンガリーに住む各方面の知人や医者などだったが、その人たちがいなければ私たちのハンガリー生活は別のものになったかもしれない(彼の著書は、Papp István『ハンガリー語日本語経済用語辞典』Szent István Egyetem 出版、2000年)。

これまで多くの外国人と知り合いになりながら、日本では何の助けもできなかったと今更ながら思う。ブダペストでは「友達の紹介だから」と家族同様の付き合いをしてくれた人たちもいるが、果たして自分に何ができるだろうか。ハンガリーで得たものは物質的なもの以上に、人の付き合い方を考え直す機会だったのかもしれない。

ハンガリーでのお気に入りあれこれ。トマトその他野菜は本当におい

しい。味がある野菜を知った。

夕方花を買って手に持ち歩いている青年もしくはおじさんの姿。夏はこれがスイカになったりもする。仕事帰りに市場で自宅用の花を買うような生活はものすごく豊かだと思う。ふらふらと人の家の庭の花を見ながら散歩したり、ドナウ川沿いの散歩は最近気に入っていることだ。

室内楽の演奏会。自分のために演奏してもらっている錯覚に陥る。バルトーク博物館のコンサートはどれも印象的だった。若くて無名な演奏家や、荒削りだけど生き生きとした演奏に出会えたのは収穫。

もっと書きたい事がある。そしてお世話になった人が大勢いる。これまで経験したことを宝物にし、さらに新しい発見もできればと思う。先日帰国した友人からの手紙には「ハンガリーでの生活は夢のよう」とあった。夢のうち一つでも日本で続けられたらと思う。

## ブダペストの生活

小田 和子

「ハンガリー駐在する事になった」と主人から聞いたのは二年半前でした。その時の私のハンガリーに関する知識と云うと、東欧にあるついでの間まで社会主義だった国、「青きドナウの流れ」のドナウ川が流れている国、こんな程度でした。なんとなく陰気な感じもして、余り期待もせずブダペストに着いたのが二年前の五月でした。

その夜、ライトアップされた鎖橋と王宮の素晴らしい景観が私を迎えてくれました。翌日、ブダペスト市内を歩いて、私のハンガリーのイメージが変わり、「あーここはヨーロッパなんだ」と感じました。

いままでの駐在地と一番大きく違っていたのは、イスラム圏ではないことで、初めてコーランの聞こえて

こない地でした。コーランもいまでも、テレビやビデオ等で聞くと懐かしさも感じますが、当時は朝から晩まで否応なく拡声器から流されるのにはイライラさせられた事もしばしばでした。

それと何よりも治安が比較的良く、女性が独りで歩いても大丈夫なのはほっとしました。スリやどろぼうが多くて、凶悪犯罪はあまり聞かないし（私が知らないだけかも知りませんが、知らぬが仏です）、安心して毎日が過ごせるのが良いです。緊張がないと心身ともに弛緩してくるのはこまりますが。

物も豊富だし、物価も安いし、人々も真面目で親切で、とつても住みやすい所というのが実感です。

ハンガリーの地方にもいろいろ行きました、のどかで素朴な所が多く気に入っています。もっとも、大平原は、ただ広いというだけで、何処も同じように思えてしまうのです

が。

最近行った中では、リラフユレドのパクタホテル、ハンガリーには珍しく山に囲まれた避暑地で、城を改造して建てられた城ホテル、パクタホテルは、外観はロマンチックで、中は落ち着いた綺麗なホテルでした。温泉プールもあり、もう一度行ってみたい所です。

ブダペストでの生活はのんびりしていて、時に退屈で暇を持て余す事もありますが、「歴史と音楽の箱庭」で、せいぜいオペラ、コンサート、ゴルフ、温泉を楽しんで、とっています。

## ハンガリー生活と私

園部 瑞恵

ハンガリーでの三年間は、私の人生で光り輝く(？)日々だったと言っても過言ではない。

初めの一年間は、自分が文盲同然であることにある日気づいて大ショック！その上、店員は横柄。サービスという観念のなさに腹を立て、何でもいい加減の国民性に落胆し、買い物一つするにも冷や汗たらたら、青くなったり、赤くなったり。とにかくハンガリーという国に振り回された感じであった。今振り返ると、その「いい加減」が「良い加減」だったとさえ思われるのだが。

ハンガリーだからよかったのか、それとも他の国でもよかったのかはわからないが、「ハンガリーでの生活はよかったか」と聞かれたら、ためらわず「よかった」と答えるであろう。

その理由の第一には、ここで多くの友人を得たことをあげたい。友人には、ハンガリー人も日本人もその他の国の人たちも含まれているが、いずれにせよ、私が日本にいたら一生会うはずもなかった人々であるのはまちがいない。まさに一期一会。

初めは取っつきにくかったハンガリー人たちは、実は義理堅い、親切な、愛すべき人々であった。いろんな場面でハンガリー人の知己にお世話になったし、日常でも何回となく見ず知らずのハンガリー人に助けてもらった。ハンガリーで受けたこの恩を何かの形で返したいと今では思っている。

また、ハンガリーで知り合った日本人は、職種も様々、出身地も様々、趣味も様々で、これらの人々と損得抜きのおつきあいができたことがとてもうれしい。特に教員など、毎日が学校と家の往復だけになりがちの狭い世界なので(教員同士の結婚が多いのもうなずけるでしょう)、これらの日本人と接するだけでも新鮮で、とても楽しかった。ところが、帰国後、一転して多忙となり、ハンガリーの人々にご無沙汰していることが心苦しい。この紙面を借りてお詫びしたい。子供にもいつも言うのであるが、ハンガリーで得た友人は一生の宝だと思っている。いろんな人がいるから楽しいのだ。自分の職場、自分の近所だけの狭い世界だけでは得難い刺激がハンガリーにはあった。

第二は、心身共に自由でいられることが多かったことである。日本では田舎に住んでいるせいか、人間関係が密



接すぎて、時に息苦しくなるのである。よいときはよいが、一挙手一動あれこれ言われたのではたまらない。(嗜好きの日本の国民性は良くないと思う。)ハンガリーでは横並び意識がなく、それぞれがそれぞれの生活をしていればそれで良かった。

それに、自分が自由だと感じられたもう一つの理由は、ハンガリーでは何の組織にも属していなかったせいではないだろうか。もちろん、学校の保護者会や日本人会の一員であり、いくつかの趣味の会に入っただけのもの、その数は日本とは比較にならない。日本では職場関係だけで五、六個の会に属し、そこに住んでいるというだけでまた五、六個の組織に属さなければならぬ(日本人はやっぱり徒党を組むのが好きなのでしょう)。四、五月の各種総会と歓送迎会だけでも、両手指が足りないくらい。

それでいて自分の意志で入る趣味の会なんて皆無という情けない状況なの

だ。年がら年中、会合ばかり多くて、しかも、そこで決まったことのために、なすべきことがまた多い。ハンガリーでは、かくあらねばならない、こうしなければならぬという制約が少なく、気持ちが楽だった。ちなみに、これは帰国後に子どもたちが漏らしたグチと同じである。

第三に、ハンガリーでは読書をたくさんしたということである。こんなに読んだのは何十年ぶりではないだろうか。もっとも、テレビやビデオ、雑誌がいつでも見られる状況にないという背景があるが。とにかく一年に百冊以上は読んだと思う。

読書ノートをつけていなかったのが悔やまれるのだが、児童書、専門書、話題の本、名作に至るまで手当たり次第に読んだ。補習校の図書室やお店が気軽に良書が借りられたのもありがたかった。まして、「お付き合い」が最小限で、自分のペースで生活できたのも大きい。読書については、私だけで

なく夫や子供達も同様であるから、ハンガリー生活のもたらすゆとりなのだろうか。

第四に、料理が上達したとは言えないまでも、工夫するすべてを身につけることができたということである。特に、貴重な日本食を無駄なく、おいしく使うノウハウを会得した(？)と自慢できる。必要は発明の母と言うのではない。手に入る素材で何とか工夫する、最後まで使い切る、といった基本的なことを日本では考えたこともなかったと思う。何でも売っていて、いつでもほしいものが手に入る日本では、その必要がなかったわけである。口の悪い叔父が、「その調子で日本に帰ってからもやっていけば、お金が貯まるぞ」と言っていたが・・・。(やっぱり帰国後は難しい)。

第五には、家族の絆が深まったことであろう。言葉や習慣がわからないときは必然的に家族に助けを求め、何でも相談し、力を合わせなければならなかった。また物理的にも家族で過ごす時間が多かった。反抗期の子もたちの態度が落ち着き、とげとげしい言葉が幾分でも減ったのは、ハンガリー効果だろうと思う。夫と子どもともずいぶんいろいろなことを話した。もちろん、ほとんどが他愛もないことなのだが、話をする事によって距離が縮まるのは家族だって同じなのだ。

このように、ハンガリー生活でわたくしが得たものはとてもたくさんある。しかし帰国後は、残念ながらもまた日本の生活に戻りつつある。忙しさに流されずに、「ハンガリー風」を日本でも実践していきたいと思うし、また、横並びの社会の中で実践していくだけの強さを持ちたいとは思っているが……。三年間のハンガリー生活で自分はどう変わったか？ある友人は、ちよつと

言葉を交わしたただけだったのに、「なんだかヨーロッパの雰囲気でした」などと訳の分からぬことを言うし、ある人は「帰ってくると流されるしかないよね」と、同情とも何ともつかぬ事を言うしで、結局はあまり変わらなかつたのかもと思う（本当は変わりはなかつたのに！）。ただ、客観的に日本を見つめる機会があつたことはとても貴重な経験だつたのは確かだ。

自然豊かなハンガリー、気取らないハンガリーの生活、人情に厚いハンガリー人、それぞれの生活を大事にするハンガリーの習慣、美しい町並み、おいしい食べ物……。どれもこれもが懐かしい。まさに住めば都。ハンガリーは私たちの第二のふるさと。心身のリフレッシュにたまには里帰りしたいと願っているが、そのときハンガリーはどんな変容を遂げているだろう。遠く離れた日本で、ハンガリーの平和と発展を心から願ひ、ハンガリーのすべてに感謝したい。みなさん、ありがとう。

## 明るい未来に向かって

秦 真弓

我が家には週一回、ハンガリー人のお手伝いさんが来てくれている。彼女は、ある日本人の方より「とても真面目で信頼できるひと」と紹介していただいた人で、本当にとても感じがよく、いつもニコニコして、働き者で、誠実な人である。

来てくれた当初は、今から一〇ヶ月ほど前 私もハンガリー語が今よりもっとわからず、必要最低限の事しか話せなかつたが、今ではお茶を飲みながら世間話をするまでの仲（？）になつてきた。最近は社会問題にまで話が発展して、フォロントの貨幣価値が下がってきたので年金生活者は大変で、家が会つても冬など電気代が払えず、凍えている老人が少なくないこと。また、教育費にお金がかかるから、今やハンガリー

も一人っ子が増えている…等など、きつとハンガリー人のその年代（六〇歳前後）の方が考えているであろうことをいろいろと話してくれる。私はどの話も大変興味深く、いつもうなずきながら聞いている。

先日、彼女（仮にMさん）と話していて、私がウィーンに行ってきた、と言うと、

「じゃあ、オペラハウスは行ってみた？」とたずねるので、

「まだ、一度も行ったことがないのよ」と、答えると、

「とてもきれいだから、一度は行くといいわよ」と彼女。

「でも、ハンガリーにもきれいなオペラハウスがありますよね。Mさんはどっちがきれいだと思う？」

「そうねー。やっぱり、ハンガリーの方が、私はきれいだと思うわ」と。

素直なMさんの返事。

「でも、二つは似ているのかしら？ 同じハプスブルグ家の統治だったし、

ね」と軽い気持ちで私が言うと、急にMさんの表情が変わり、

「まあね、でもマジヤール人は本当はハプスブルグ家に統治してもらいたくなかったのよね。仕方なくそうなってしまったけれど。トルコが攻めてきた時いやだったけど、ハプスブルグに支配されていたときもいやだったのよ。マジヤールはマジヤール自身の独自の国を築きたいの」と、まるで、自分がすべての時代を過ごしてきたかのように切々と話してくれた。そして、「マジヤールはこの時代もいろいろな国に征服され続けて…なんてかわいそうな国！」と付け加えた。

いつもは明るいMさんなのに、このマジヤール国、マジヤール人に話が及ぶと必ず、彼女の顔が掻き曇る。まあ、ハンガリーの歴史を考えれば、無理もない…と納得するのだが。

日本の歴史を振り返ってみるに、日本は海に囲まれているので、外部

からの侵入に対して、それほど緊張はしていないし、近現代の歴史においても外国からひどい侵入をうけてはいない、唯一挙げれば、広島、長崎に受けた原爆であろうか。だから、日本は外国に対してハンガリーほど敵対心も恨みも持っていない、と私は（あくまで、私は）考える。

今年（西暦二千年）ハンガリーが西欧世界の東端に位置するカトリック国として歩みはじめて、ちょうど千年記念の年にあたる。これから、この国がどのような道を歩んでいくのかはまさに「神のみぞ知る」のであるが、今、ある巡り合わせで、この地に生きている私はこの国の人々が、もう過去を愁いするのではなく、明るい未来に向かって、突き進んでほしいと願っている。

## 私のハンガリー

大杉 千恵子

最初に私がハンガリーに来たのは九三年の夏、七年前の事でした。七年の一月からは国際協力事業団（JICA）生産性向上プロジェクトの業務 調整員としてブダペストで働いていました。今まで色々な方々にお世話になりながら無事に過ごしてこられました。お蔭様でプロジェクトは昨年末を持って五年間の協力活動を終え、日本人専門家は全員、無事帰国いたしました。この場をお借りしてお世話になった皆様にお礼を申し上げたいと存じます。色々助けて頂いた方々の中から、私を含め我々の仲間がひとかたならぬお世話になったお医者さまの事を書いてみたいと思います。

ペースメーカー

今から四年前のことです。当時、プロジェクトの技術専門家として派遣され、ブダペストに住んでいた日本人が当地で心臓の手術を受けました。もともと心臓病は持病であり、派遣期間中に急に具合が悪くなつて、心臓手術の運びとなつたわけです。心臓手術といつても、オープンハートの大掛かりなものではなく、ペースメーカー（注参照）を入れるだけの、専門医に言わせれば、比較的簡単なものでした。

その手術にあたっては、出来れば日本に帰って日本人の主治医のもとでやってもらうのが一番安心であったのでしようが、当時の患者の心臓は日本までの長旅に耐えられないというのがハンガリーの医師の判断でした。家族や関係者の心配をよそに手術を受ける本人は医師と信頼関係がうまく築けたらしく、比較的落ち着いて手術に臨んだそうです。この時、手術を担当する医師を紹介し、

患者や家族と話しをし、オランダにペースメーカーを注文し、一切取りしきつたのがドクター・ブコツサ（Dr. Bukosza）です。

### 心臓専門医

ドクター・ブコツサはブダペスト生まれの五二歳。両親は共に化学者という家庭に三人兄弟の長男として生まれました。八歳の時に盲腸にかかり、手術を受けた時に出会ったお医者さん、病院の様子が非常に興味深く、大きくなつたら医師になろうと思つたそうです。高校時代は音楽に熱中し、バンドを組んでギターを弾いたりもし、医師になる決意は固かつたといえます。小さい頃一緒に「手術ごっこ」をして遊んだすぐ下の妹さんも医師に、一七歳年下の弟さんは経済の専門家になりました。ブダペストの医学校を一九七二年に卒業後、サボルチ通り病院でインターンをし、引き続き同じ病院で二

七年間働きました。七七年に内科医としての、そして八一年に循環器系の専門医としての資格を取ったそうです。最初は、循環器系の集中治療室勤務、その後はオーブンハート手術の術後治療に携わりました。オーブンハート手術の術後のケアは激務でしたが心臓病とその治療の全容を学ぶことが出来、非常に勉強になったと述懐しています。

五年間独立して開業医となり、今は西駅の傍にクリニックを開いています。す ( Medigraphic, 1064 Budapest, Podomaniczky u. 65, IV/401, TEL:06-309-498-362)。ハンガリーにおいては医師は、特に病院勤めの場合、収入面であまり恵まれないのですが、それでも医師になって良かったと確信しているそうです。特に循環器系の医師は医学の知識や技術だけではなく、体を使って、人工呼吸するなど肉体的な仕事もあり面白いそうです。また、一九八〇年

代は心臓病の治療において実に様々な新しい方法が開発された時期で、心臓病治療に長足の進歩が見られました。その様な時代に専門医として仕事が出来た事はこの上なく大きな喜びだったということです。

#### 健康よろず相談

前述の専門家のペースメーカー手術をきっかけに、ドクター・プロッサはそのJICA生産性向上プロジェクトの所属先、ハンガリー生産性センター(通称「HPC」)の顧問医となられました。それ以来日本から派遣されてくる専門家は皆、ドクター・プロッサのお世話になったわけですが、風邪を引いた、怪我をした、血圧が高い、お腹が痛い、首が回らない、最近どうも調子が悪い、若しかしたら妊娠、等々健康に関するよろず相談窓口になって下さいました。特に心臓に関係のない問題でも、まずはドクター・プロッサの所へ行き、ざっ

と見てもらってから、専門医を紹介してもらおうというシステムでした。必要に応じて、往診をしてもらった専門家もいます。残念ながら日本語は出来ないのですが、英語で対応して下さいます。人間味のあるあたたい感じのドクターです。プロジェクトは終わりましたが、懇意にして頂いている医師がいるというのは心強いものです。

遠からず日本人専門家が個別で赴任する予定もあるという、ハンガリー生産性センターは現在ハンガリー人スタッフが独自で運営しております。今後ともご指導ご鞭撻のほど、どうぞ宜しくお願いいたします。(注)ペースメーカーは心臓の鼓動を促す事は出来るのですが、早すぎる鼓動を遅らせることは出来ないで、遅らせる必要がある場合は薬を使うということです。ペースメーカーと投薬を併用して心臓の鼓動を調整することが出来るのだそうです。

## わらべの会

柴田 幸代

一九九八年の春、ちょうど私達家族がブダペストへ来て半年経った頃、バラトン湖畔のケストヘイに住むサライ美奈さんから、「国際子育て通信」というミニコミ誌の創刊号が届いた。それから暫くして、彼女自身より長いファックスが届いた。

彼女はもともと、ハンガリーのコダーイの理論に基づく保育を実践している日本の羽仁財団のコダーイ芸術研究所から派遣された留学生だったが、その後ハンガリー人と結婚をした。一度はご主人と日本に戻り、神戸で保育所に勤められたが、震災で住居が全壊したのを契機にハンガリーへ戻って、ヨットのコーチを専門とするご主人の仕事の都合と、親戚などの多いバラトン湖畔に住まわれた。

そして日本から「コダーイの保育」を研修に来る保母さんたちのグループを受け入れる世話や通訳、またハンガリーの保育士たちを日本へ派遣する仕事などをされている。

そういう国際的にも有名なハンガリーならではの保育方法を、日本のこども向けにアレンジした実践経験を生かして、ブダペスト在住のこどもたちには何か出来ることはないだろうか、という内容のファックスだった。

乳児、幼児向けには、日本のわらべ歌や手あそび、また、専門知識があるので、発達相談や、良書、おもちゃの紹介ができるとのこと。また、学童向けには、バラトン湖畔の自宅がペンション風な造りになっていて、二階部分がすべてゲスト用の部屋なので、こども達の合宿を行なっていて、四季折々のバラトンの農家の仕事の手伝い、季節ごとの手作り品、また釣りやスケートも出来るという提案

を出してくれた。

「コダーイ」というのは、あの有名な作曲家の「コダーイ」であるが、私もその後、高橋美智子さんをはじめ、音楽関係のことを学習にきている多くの人と会う機会があり、コダーイの直弟子のフォーライ・カタリン先生のお話を伺ったりして、コダーイがどういう仕事をした人なのか理解が深まってきた。

彼は、単に日本で知られるところの作曲家ではなくて、すぐれた言語学者であったこと。また、各地農民の民謡も採集した人でもあるが、そういう作業を通じて、貴族の娯楽であった音楽というものを民衆のすべてに与えようとした人であることがわかった。

コダーイの考えたソルフエージュのメソッドは、日本で売られている子供向けのピアノの入門過程の楽譜にも必ずといっていいほど取り入れられている。そしてここからの部分

は、合唱を学ぶ方と保育を専門とする方のほうがよくご存知なのだけれど、コダーイはメロディにつけられている歌詞の情緒性を大切にした人である。

ハンガリーのこどもに与えるわらべ歌の歌詞は大変美しい。花にたとえたり、「宝石色の鳥」などという表現が出てくる。

ハンガリー人のおとなは、我が家の三歳の末娘に対して、「小さなお花ちゃん」、「金の星ちゃん」などと呼ぶ。こんな美しい言葉で呼びかけられるこどもたちのなんと幸せなところか、と思う。

わらべ歌や手遊びなどの美しい歌詞とその国民性のもつ旋律を通じて、こども達の情緒をはぐくみ、将来その国の言葉を身につけ味わい文学の基本も与えているのが、コダーイの理念のひとつの特徴である。このよなことは、ほんの一つの断片に過ぎないけれど、自分の子、よその子

を問わず、こどもたちに接するハンガリー人の優しさを感じるたびに、子育ての場でこの理念がより深く広くゆきわたっているのだと思う。

私の家族はこどもが三人おり、それぞれ小学五年生、小学三年生、その後六ヶ月の時にハンガリーにきたので、サライ美奈さんの提案はちょうど我が家のこどもが参加できる年齢であったので、その年の九月から「わらべの会」と名まえをつけて発足させた。

毎月第一木曜日が幼児の日、第一金曜日が乳児の日で、それぞれ十人くらいの赤ちゃんとその親が我が家に集まってくる。

最初、多勢のよその子を見てひるむ赤ちゃんもいて、場に慣れ遊びだすのに多少個人差はあるけれど、だんだん興味のあるおもちゃを手に取ったり、よその子の様子を見て真似たりと活動が始まる。

美奈さんは、毎回ハンガリーで手

に入るこどもの知育発達を促すような木製の良いおもちゃを紹介してくれるので、こどもたちも毎回前とはちよつと違うおもちゃで遊んでいる。

また季節や天候に応じて、家の中で木の実を使った工作をしたり、外で水に触ったりする。みんながひとりひとり新しいものを触り終えるころ、親子で遊べる手あそびや歌をひとつふたつ教えてもらって一緒にうたったりする。

これだけのことなのだけれども、とても豊かな楽しいひとときに見える。子であり、母であり、そして周囲が安心できる環境であれば、子であることも母であることもこのうえなく幸せなことなのだと思う。

学童の部は、一ヶ月か二ヶ月に一度、通常は土曜日と日曜日をつかって合宿がある。保育の勉強に来ている留学生が、東駅からケストヘイまでの引率をしてくれている。

こども達は、飯釜でごはんを炊いた

り、バーベキューに使う串を木の枝で手作りしたりする。プログラムは季節に応じていろいろなことをするのだが、秋のぶどう狩りやバラトンでの小魚釣りはおとなも楽しんでいける行事だ。

広いぶどう園の農家のぶどうを摘む手伝いをし、こどもはそれもすぐに飽きるので、地元のひとつに山へ連れて行ってもらい、教わったたべられるきのこを探したり、お昼は外で大鍋を囲んでグヤーシユをご馳走になる。また、小魚釣りは、竹竿にえさをつけただけの簡単なものだけだ。おもしろいように魚がつれる。大きい子たちは、ひとりで三〇匹くらい釣っている。それをこどもたちが頭とワタをとり、てんぷらにする。新鮮でとても美味しい。

クリスマスには三メートルの大木のツリーに固焼きのクッキーやら市販のキャンディやらたくさん飾りつけをした。これも楽しかった。

こども達が合宿中、おとなはヘーヴィーズ（ケストヘイから車で一〇分）の温泉湖につかりに行ったこともある。

上のふたりのこどもは、それぞれが中学二年生と小学六年生になった。アメリカンスクールと日本人補習校の二つに通い、毎日英語と日本語を話す生活で、ハンガリーの文化に触れる機会がなかなか無く、ハンガリー語はまったく話せないが、この「わらべの会」でハンガリーの自然を見たり、生活体験をしたりで、多感なこの時期に得たものは大きいと思う。また、三歳の女の子は現在ハンガリーの保育所に通っているが、ベビースITTERの献身的なまでの助けがいつもずっとあり、言葉にも不自由なく、のびのび成長をしている。

我が家のこどもたちは、この「わらべの会」のおかげでハンガリーをこころのふるさとのように感ずるところだろうと思う。

私も、とても良い時期に夫の駐在により偶然ここへ来られたこと、そして夢をもち、心あり才能ある多くの人々に出会えたことを大変幸運なことだと感謝している。

ブダペストに暮らす日本人の皆様が、こころの財産を築かれますよう、願っております。

「国際子育て通信」は、世界の国々で子育てをしている日本人のための知的ミニコミ誌です。購読希望の方、また「わらべの会」への申し込みは、下記へどうぞ。

**サライ美奈** Tel/Fax 0683-316-035

e-mail:ohayo@matavnet.hu

**柴田 幸代** Tel/Fax 1-335-5039

e-mail:sibara-yuki@attglobal.net



## スキューバ

## ダイビングの世界

### 水深三〇mでの出来事

江田 昌宏

私達夫婦がスキューバダイビングのライセンスを日本で取得したのは、ハンガリー駐在が決まる三ヶ月前のことでした。

二人とも学生時代からテニスを嗜んでおりましたが、クラブ以外のプライベートで二人だけでテニスをしたことはなく、共通の趣味とは言えませんでした。

二人でテニスをした場合、“鬼コーチVS負けず嫌いの下手っぴ”の壮絶なバトルが始まるのが目にみえていたからです。

昔からスキューバダイビングに興味を持っていた私は、新婚旅行先のタヒチ、またグアムにて妻を体験ダ

イビングに誘い、家では熱帯魚を飼いつつ少しづつ洗脳し、二五mも泳げない妻をライセンス取得までこぎつけ、ようやく共通の趣味を持てることになりました。ダイビングチームの仲間にも恵まれ、その後は妻もダイビングにのめり込み、ほぼ毎週伊豆で潜っていた絶頂期にハンガリー駐在を言い渡されました。

私達が着任した九七年は四連休が多く、夏冬の長期休暇とあわせて、多くのヨーロッパ主要都市を訪れることができ、眠っていたダイビングの血がうずき始め、世界のダイビングスポットに飛び出したのは翌年の夏からでした。

まとまった休みが取れ、日本にいては夢のようなスポットを潜れることもヨーロッパ駐在の一つの特権と思いい、世界の海を潜ってきた経験をご紹介します。

### 最悪のヨーロッパデビュー〜クロアチア・オパティア

当時の上司に誘われ、期せずして訪れることになったオパティアはアドリア海の保養地として有名です。車でザグレブ迄五時間、そこから豚や羊の丸焼きを左右に見ながら、約二時間程走るとアドリア海に辿り着きます。

期待もせずに器材を持って行きましたが、偶然ホテルの目の前にダイビングショップがありました。早速ガイドを頼んで潜ってみると、そこは空缶やごみくずの海。たまにすれ違う魚も、「こんな所で潜って何しとる」と馬鹿にした顔で通り過ぎていきます。その後ザグレブに戻り、飛行機で訪れた城塞都市ドブロブニクの海は澄んでいてきれいでしたが、ウニばかりで夏なのに水も冷たく、一分と水中にはいられません。後で聞けば、オパティアからもう少し外れたポイントはすばらしいとの

ことでしたが、少なくともオパティ  
アはアドリア海という名前に酔い、  
レストランから海を眺めていること  
をお勧めします。

## 砂漠の海／紅海・シャルムエルシェイク

カイロから飛行機で四五分、シナイ半島の先端シャルムエルシェイクはダイバー憧れのスポットです。

海辺には大型ホテルが立ち並び、一大リゾートを築いておりますが、ホテルから船着き場までは、野良犬ならぬ野良ラクダ（首輪もつけずに、柵もなく道端をポクポク歩いていく）を横目に、荒涼とした地獄の果てのような赤土の中を走っていきま  
す。しかしながら海の中は砂漠の陸上とは一変した生物の宝庫であり、カラフルな熱帯魚や珊瑚がひしめいており、まるで人工的な水族館のよう  
です。

第二次世界大戦で沈んだ全長一

五mの英国戦艦や、一日のダイバー  
数を規制している国定海洋公園のス  
ポット等、変化に富んだダイビング  
が楽しめます。

また時間になれば船の上でマット  
を広げ、お祈りをするエジプト人常  
務員も印象的でした。ただし七、八  
月は避けた方が良いでしょう。いく  
らパラソルの下でも熱気で呼吸もで  
きず、水中かホテルのクーラーの中  
でしか生存できません。

もっともハンガリーに戻ってきた時  
に気温が四〇度近くても、涼しいと  
思えるメリットはあります。

## 松田聖子の歌とはちよつと違う／ゼーシェル・マへ島

英国領であったゼーシェルは左側  
通行で、驚いたことに島内を走るほ  
とんどの車が日本車でした。

うわさで聞いていた機内での殺菌  
スプレーの洗礼を受け、ナイロビか  
ら約三時間のフライトで首都のある

マへ島に着きます。

たしかにホテルから眺める海の景  
色はロマンティックな雰囲気ですが、  
一言で印象を言うならば、漁村とい  
う言葉が出てきてしまいます。島の  
北部にあるホテル群のあるビーチは  
狭く、波も荒かったので水遊びには  
向いていませんでした。海中は総じ  
て流れが強く、あるスポットでは海  
底に這いつくばってしか進めず、大  
変苦労しました。しかしその先には  
体長一m程のバラクーダの群れが流  
れに逆らって泳いでおり、それは口  
では言い表せない幻想的な光景でし  
た。

激しい海に疲弊して無口になって  
いる妻に追い討ちをかけたのは巨大  
ウニでした。岩陰のサメを覗き込ん  
だところ、ひざの下のウニに気づか  
ず二 ドロップ。ウエットスーツを  
通り抜け、ひざ下に突きさったまま  
ウニの刺を二〇本程持ち帰ってしま  
い、現地人に見せたところ、レモン  
を一生懸命擦り込んでくれました。  
これが一番効くとのこと。足に残っ  
たウニの刺からウニが生えてくると  
散々脅かされましたが、レモンによ  
る処置のおかげか、幸い妻はウニ人  
間にはなっておりません。今のとこ  
ろ。

### 今度はエイに襲われるノカリブ海・ グランドケイマン

英国領グランドケイマンはロンド  
ンから六時間でバハマ着、四五分の  
停留の後、キューバの上を飛んで一  
時間で着きます。

ここには世界的に有名な“ステイ

ングレイ・シティ”というしゃれた  
名前のダイビングスポットがありま  
す。水深5m位の浅い砂地にアカエ  
イ(ステイングレイ)が餌付けされ  
ており、ボートのエンジン音を聞く  
だけで、大きいもので1m以上もす  
るアカエイがうじゃうじゃと寄っ  
てきます。ウニに続く不幸が妻の身に  
起こったのはその時です。

楽しそうに餌をあげていた妻に覆  
い被さったエイは、餌と間違え右腕  
をガブリ。

水中で呼吸困難になるほど笑い転  
げていた私は、船上で噛み傷を見て  
驚きました。そこにはエイの歯形が

くつきりと残っているではないです  
か。可哀相と思う反面大笑い。陽気  
なカリビアンダイバー達も同じよう  
に指さして笑っており、お陰で妻は  
“腕にエイの噛み傷を持つ日本人”  
として有名になってしまいました。  
この貴重なエイの噛み傷は今でも妻  
の右腕で見られますのでご興味があ  
る方はご自由にご覧下さい。

海はとても透明度が高く、優雅に  
泳ぐトビエイ、ウミガメ等のみなら  
ず、数百mも落ち込む絶壁、洞窟が  
印象的で、もう一度行きたいスポッ  
トです。

ステイングレイ・シティ以外は。

### 夢にまで見たマンタノモルジブ

モルジブへはウィーンからダイレ  
クト便(途中ドバイにて一ストップ)  
で一時間の長いフライトでした。  
到着した国際空港から私達のホテル  
まで水上飛行機で三〇分。

そこにはマンタポイントという有

名なスポットがあり、私達が行った一月にはマンタとの遭遇率が九〇%を超えるとのこと。今までわずか数分のニアミスはあったものの、一度もマンタを見たことがなかった私達の期待は大いに膨れ上がりました。早速二日目にマンタポイントに行く機会がありました。結果は散々。

期待したマンタに会えず、早くエアが切れて、船上でがっかりしながら他のダイバーを待っている、すぐ一〇m先でマンタが水面をジャンプ。後からあがってきた私達以外のダイバーは水中でマンタに会ったとこのことで皆さん興奮しておりました。ここまでマンタ運がないのかとブルーな気分。島に戻ってくると、島の近くでは野生のイルカが私達を出迎え、なぐさめてくれました。

しておりましたが、わずか数秒の差でこれらを見逃した妻の顔には笑顔が消えていました。モルジブを離れる前日、再度マンタスポットに行く機会に恵まれ、今度こそと気合を入れ、少しでも水中にとどまるよう入念な作戦を練って望んだ最終ダイビング。潜降した瞬間、息をするのも忘れ、目を見張ってしまいました。そこには三m近くあるマンタが優雅に泳いでいたのです。その後次から次へとマンタが現れ、初めから終わりまでの約一時間、全てがマンタショーでした。目の前でひらひらとなびくマンタの姿は本当に美しく、ダイビングをやっているだけでよかったです。つくづく思い知った一時でした。

ています。前回は潮の流れが悪く、これだけ多くのマンタが来なかったとのことでした。笑顔の戻った妻の顔を見て、またこれからもダイビングを続けられると一安心。ハンガリーの隠れたダイビングスポットノヘーヴィーズ海のないハンガリーにも有名なダイビングスポットがあります。あの温泉湖で有名なヘーヴィーズです。私の知るハンガリー人ダイバーはほとんどそこで潜っており、これからは書くことはそのダイバー達から聞いた話です。

水深は四〇mもあり、通常二七m迄しか潜ってはいけない一般ダイバーには未知の世界です。水深三〇m付近迄は強い流れの中、綱をつたってこいのぼり状態で潜降、水は濁っていて目の前の綱も見えない状態が続くが、三〇mを超えると急に視界が開け、海底から温泉が湧き出ている様子が見られるとのこと。

深いポイントに潜った後は血中の酸素濃度を徐々に下げる為、潜降に要した時間の三倍以上、すなわち三分以上かけてゆっくりと上がってこなくてはなりません。

あまり潜る気にはなれませんよね。

### ダイビングの楽しみ

私はダイビングには四つの楽しめる要素があると思います。

一．魚を見る楽しみ。二．水中の山や谷などの風景を見る楽しみ。三．浮遊感。四．ダイビング後に他のダイバーと貴重な経験を分かち合う楽

しみ。

通常、私達は二次元で行動してきますが、水中では空を飛ぶこともできます。魚や地形はある程度水族館やビデオで見られますが（もつとも生の迫力は違いますが）浮遊感は宇宙飛行士になるか、それとも竹コブターでも発明されない限り得難いものであり、これら全部の要素を他人と共有し、語り合うことがダイビングの醍醐味と考えます。ルールさえ守ればダイビングは決して危険なスポーツではなく、また水中で体の負担も少ないことから、ボートを使えばお年寄りでも充分できます。

実際に、仲の良さそうな老夫婦やお年寄りのチームを多く見かけました。

ダイビングをおしゃれなスポーツと想って始めると、現実との大きなギャップに打ちひしがれます。これは紙面では書けませんので、妻に直接聞いて下さい。

中学から始めたテニスしか知らなかった私にとつて、他人と争うことのないダイビングは大きな発見でありました。

これからもどんどん潜っていきたいと思います（伴侶の許す限り）。

## 私とハンガリー

菱木 勤治

ハンガリーに滞在した日本人で、この国に悪い感情を持って帰った人は少数派であろう。

むしろ、圧倒的多数は好きになり、いい思い出を持って帰るのではないだろうか。小生ももちろん多数派で、九四年の三カ月の長期出張の際も、今回の昨年九月以来の駐在でもこの国に決定的にいやな思いをしたことはない。

前回の滞在で気づかなかった素晴らしい点は、事務所のエレベーターで乗り合わせた人同士が、気軽に挨拶することだ。日本では知り合いや上司には丁寧挨拶しても、他人には知らん振りなので最初は戸惑ったが、慣れると気分がいいものである。電車・バスで年寄りに席を譲るのは、当国のみならず西欧では普通だが、

これも日本では恥ずかしいことだが、習慣化していない。

さて、ある国の印象は景観や食事よりも、人に左右されることが多いと思われる。そこで小生が感じたままを書いたハンガリー人の特徴・性格を、最近ジエトロがとりまとめた「ハンガリー投資ガイドブック」から紹介したい。私の性分から、いい面だけをごますりに書くのではない、短所についても触れバランス良く書いたつもりだ。

「ハンガリー人はアジア系民族であり、日本人とは発想・思考様式が似ている面があり、親しみやすく、ウェットでシャイな人が多い。しかし、底辺に流れる思考・文化は基本的に西欧型である。概して勤勉であり、頭がよく、言われたことはしっかりやるが、問題点をみつけて解決していく志向・訓練は不足しているようだ。

ヨーロッパ流のしつけと教育が幼

時からなされているため、個性が確立し自立志向が強い。男性は女性に優しく、レディーファーストのマナーが確立されている。

オフィスや工場では、個人の仕事に細分化されていて、自分の仕事以外は関知しない傾向がある。何か問題が生じて、すぐ自分の責任を認めず、言い分けをすることが多い。

技術者・研究者のレベルは相当高く、ブダペスト工科・経済大学の卒業生の能力水準は、日本の大学院のトップクラスに匹敵する。研究者は長年にわたり基礎研究を積み上げており、長期的な視野・展望のもとに研究しているので、小手先の応用より本格的な研究が得意である。

総じて、ハンガリー人は瞬発力を出して頑張るよりも、ものごとを計算してじっくり仕事をこなす方が得意であり、陸上競技でいえば短距離よりも、マラソン選手向きといえよう。

この短文で不足しているのは、ハンガリー人の国、郷土、家族を大切にす心、センチメントとプライドの高さである。最近聞いたセミナーでは、職場で外国人上司が誤りをストリートに指摘すると、感情的になるということなので、この辺は欧米一般とは大分違うようだ。

欧米と違うといえば、交通マナーの悪さもなかなかだ。イギリスでドライブした人の話では、あちらでは「ジェントルマンの国」だけに交通マナーは最高であったそうだ。

次の短文も前述した「投資ガイドブック」で紹介した、交通マナーに関するもの。日々車通勤し不規則運転や悪いマナーを目にする人は、共感されると思う。

「交通マナーは、けしてよくない。街中をものすごいスピードで走ったり、バスレーンを平気で走行し、列の先頭に素早く割り込む人をよく見かける。また、歩行者優先は建前だ

けで、車（運転者）が優先されることが普通のため、市街の散歩では要注意だ。お役所などで、ゆったり仕事をしている光景を見慣れると、自分中心で先を急いで運転するマナーは信じられない」。

## 掲示板

アパート貸します。（九月より）

一三区、アルパード駅から徒歩三分。交通の便良し。

電話、家具、冷蔵庫付き三部屋。

（五一㎡）駐車スペースあり。治安良好。

連絡先:Tel&Fax 339-9491(杉本まで)

快適な生活をアシスタントします。

## 編集室より

次号の締め切りは、一二月中旬とさせていただきます。

TEL/FAX: 266-4967

e-mail: t-morita@hungary.net

## 二〇世紀を創った ハンガリー人列伝

(その二)

セント・ジョルジィ・アルベルト

マルクス・ジョルジュ著

盛田 常夫 編集・翻訳

### パブリカ賞

人類にとってアインシュタインが  
科学者のシンボルであるとすれば、  
ハンガリー人にとって科学の英雄は  
セント・ジョルジィ・アルベルトであ  
る。二世紀の運命が彼をヒーロー  
にした。彼はハンガリーの国民的香  
辛料の原料であるパブリカから、ビ  
タミンCを分離したのである。ノー  
ベル賞メダルをハンガリーに持ち帰  
った唯一の科学者であり、そのメダ

ルは国立博物館に展示されている。  
ノーベル賞はビタミンCの発見と研  
究にたいし送られたもので、*Time*  
誌はこれを「パブリカ賞」と表現し  
た。学生の間では、彼のニックネー  
ムは「聖ジョージ」(ハンガリー語の  
*Szent* は英語の *Saint*)で、まさに  
名の通り竜と闘ったのである。

セント・ジョルジィは貴族の家系  
で医学に関係している出自だった。  
そういう関係で、彼は早くから生科  
学の研究者になることを目指してい  
た。彼は「ライラックの香りのする  
ブダペスト」で生まれ、裕福な教育  
のある家族の息子としてカルビン教  
会で洗礼を受けた。ブダペストの医  
学学校を卒業し、第一次世界大戦の  
前線で経験を積むことになった。

戦争が終わり、オーストリア・ハン  
ガリー帝国が崩壊した。兄のパール  
は活動的な社会民主主義者になり、  
短命に終わった共産主義時代に一度、  
その後、樹立された右翼軍事政権で

も数ヶ月拘置されることになった。

セント・ジョルジィはポジョニイ  
大学で働くことになった。当時、ポ  
ジョニイはまだハンガリーの領土の  
一部で、その後、ブラチスラバと名  
が変わり、スロバキアの首都になっ  
た。この時、彼は不法出国のような  
冒険を経験した。実験用具を密輸出  
するがごとく、ダニユーブ河を修道  
女の一団(*Soror Angelica*)とともに船  
で下るといふ口マチックな一夜だっ  
た。軍事政権は時計の針を一九世紀  
に戻そうとした。将来が見えないと  
判断したアルベルトは、ヨーロッパ  
とアメリカへの放浪の旅に出ること  
になった(一九一九年)。



## ビタミンCの発見

セント・ジョルジイはエネルギーが細胞内に酸化を発生させることに興味があった。彼は酸化を媒介し制御する化合物で、燃焼しないものを発見した。それは牛の副腎腺から抽出されるもので、その抽出には多くの副腎とお金が必要だった。だから、アルベルトは常に研究のスポンサーを見つげるために、動き回らなければならなかった。彼の成果は報酬よりも名声をもたらすことになった。

一九二八年、啓蒙的な教育相であるクノ・クレベルスベルグ卿は、この若い青年をブダペストに招聘した。大臣は近代科学のなかでもとくに実験生物学がハンガリーの将来にとって重要なものだと考えていることをアルベルトに話し、新設のセグド大学にロックフェラー財団の支援で生化学研究所を創ることを提案した。ケンブリッジでの約束されていたキャリアを諦めるほどに、この提案

はアルベルトにとって魅力的なものだった。

一九三一年、若い教授がセグドに到着した。ドライブと飛行が好きな若い教授は、すぐに学生のアイドルになった。学生を家に招いたり、遠足に出かけたりした。日曜日になると、一緒にテイサ河で水着を付けずに泳いだ（医学部の学生の半分以上は女学生だったが）。教授の回りには、有能な研究者が育つていった。彼はロックフェラー財団にこう手紙を書いている。

「ハンガリーのような小国では、有能な科学者は国外へ出ないで国内で頑張るといふ愛国心が必要です。そうでなければ、この国は瞬く間に枯渇してしまいます」。

セグドには研究所の利点があった。セグドのキャンパスにはやはり若いバイ・ゾルターン教授がいた。アルベルトは彼に向かって、「物理学者がいるような所に来て、僕はとて

も嬉しい。生物学の将来は量子力学によって強く影響されると確信しているからだ」と話している。

副腎腺から抽出した不思議な化合物は、依然として彼の関心の的だった。論文の最初の原稿では、この糖のような化合物をイグノーゼ (ignose、don't-know-sugar) と名付けたが、権威ある *Biochemical Journal* の編集者はこれを拒否した。これを改名したゴツドノーゼ (godnose、a sugar-only-god-knows) も拒否された。編集者はヘクスロニック酸 (Hexuronic acid) を提案した。すっぱい味がして、分子のなかに六個の炭素原子を持つというのが命名の理由だった。

オレンジにはヘクスロニック酸が豊富に含まれている。ある夜、アルベルトは夕食の残りの新鮮なパプリカを調べて見ようと思いついた。何と、ヘクスロニック酸の塊のようなもので、オレンジのそれに比べて六

倍も多く含まれていることが分かった（一キロ当たりニグラム）。パプリカは分離が容易な糖をこれ以外に含んでいない。今ではもちろん、グラム単位でなく、キロ単位でこの化合物が入手可能になっている。

セゲド大学のモルモットによる実験で、この化合物が壊血病を治癒させる効果を持つことが証明され、アスコルビン酸（ascorbic acid）という科学名を得ることになった。これが今ビタミンCとして知られているものである。

セント・ジョルジイはアスコルビン酸のサンプルを大量に世界の化学研究所に送り、それによってこの正確な分子構造が決定された。さらに、大量生産も実現した。セント・ジョルジイ教授はビタミンCがたんに壊血病を直す薬でなく、細胞の酸化プロセスで制御の中心的な役割を担う機能によって、健康を維持し、罹病を防ぐ重要な食物構成物だと認識して

いた。彼はパプリカからビタミンCを豊富に含む香料を製造する会社の設立を推奨し、その商標はパプリカとビタミンの合成語として、プリタミン（Pritamin）と命名された。

ビタミンCの存在確認によって、アルベルト・セント・ジョルジイはノーベル生理・医学賞を受賞した（一九三七年）。これは学生の熱狂的な祝いを受けたが、他の教授たちの妬みも受けた。ノーベル賞をお金で買収したという根も葉もない噂が流されたりした。

それから五年を経て、筆者は八歳になった教授とケープ・コッドの海鮮レストランで一緒に食事した。彼は当時を回想してこう語ってくれた。

「ノーベル賞を受賞した後、新しい教育大臣がセゲド大学の一九三八～三九年度の始業式に来てくれた。学長が僕を大臣に紹介すると、『あー君がそうか。ビタミンCノーベル賞

の。僕は知っているよ、あれが詐欺だっていうのを。でも、これを宣伝して、パプリカを外国に売ってくれ給え』と言ったのだ。さらに続けて、こんな話も聞かせてくれた。

「ノーベル賞によって外国からいくつも栄誉を受けたが、最後になって、一九三九年に電報が届き、ハンガリーの総統が謁見することになった。さて、僕が総統室に入ると、僕の手を握って、コルヴィン金鎖を授与してくれた。それから、乗馬の話や、各種の種馬の善し悪しなど取りとめもなく話し合ったのだ。

暫く経って、総統の副官が小さく咳をして、謁見の時間が終わったことを知らせた。総統に返礼し、部屋を出た。出口の所で、この副官が言い訳するに、『次の謁見者が馬のトレーダーで、多分、総統は二人の受賞者を混同してしまった』という。そこで僕はこう言った。『可愛そうに、彼は今ごろ、生化学の議論に巻

き込まれているよ」と。

こうやってセント・ジョルジイから二人の教育相、クレベルスベルグとホーフマンの違いや、ホルティ総統の話が聞かされて、なるほどと納得したものだ。

### 戦時から戦後へ

一九四一年にソ連がフィンランドを攻撃した時、ノーベル賞メダルをフィンランド赤十字に贈ることで、連帯を表明しようとした（デンマークのニールス・ボアも同じ行動をとった）。オークションでハンガリー系アメリカ人のビジネスマンがこのメダルを落札し、ハンガリー国立博物館に寄贈した。

セント・ジョルジイがセゲド大学学長になった折、彼は戦時体制の中の学生が向かうべき方向に気を配った。セゲド学生青年（SZEI）の組織作りを助けて、一九四一年代の軍国主義的な雰囲気の中でも自由な思考

ができるような場を造った。ハンガリーは次第にドイツ側に巻き込まれる形で、戦争に入ることになった。「セント・ジョルジイの戦時の冒険は、安いスパイ小説にはなるようなものだった」。彼の顔は良く知られていたもので、地下活動をおこなうのは容易でなかった。

第二次世界大戦後、セント・ジョルジイはブダペスト大学教授になり、生化学研究所を創設して、筋肉研究の新しい研究グループを育成することになった。筋肉の収縮において、ATP（アデノシン三リン酸）からどのようなようにエネルギーが獲得されるのが研究課題だった。当時、筆者はブダペスト大学の学生で、セント・ジョルジイ教授がお昼休みに学生とバレーボールを楽しんでいたのを覚えている。当時のハンガリーでは、教授が学生と遊ぶというのは一般的な光景ではなかったし、ノーベル賞受賞

者ならなおさらという雰囲気であった。

セント・ジョルジイは保守的な歴史家や政治学者が支配しているハンガリー科学アカデミーに対抗して、近代的で民主的な協会を創る運動に参加した。また、友人で実業家のイシュトヴァーン・ラーツの支援を受けて、困窮しているアカデミー会員に食料を配ったりした。そして、市民民主党の党首になり、国会議員にもなった。しかし、ハンガリーの戦後民主主義は長く続かなかつた。セント・ジョルジイが講演旅行でスイスに滞在している時に、ラーツが資本家だという理由で逮捕された。これを知ったセント・ジョルジイは当局に強い抗議を伝えた。その結果、ラーツは解放され、財産をハンガリーに残すことで、出国が認められた。スイスに着いたラーツは拷問の様子をセント・ジョルジイに語った。

一九四七年、セント・ジョルジイはハンガリーに戻らないことを決断した。

## アメリカでの研究生生活

アメリカでの研究活動の再開は容易でなかった。暫くして、オツペンハイマーが彼をプリンストンに招待し、アメリカ人の指導の下に働く気があれば、僅かな給与だがプリンストンで受け入れる用意があるということだった。彼等としては、すでに名を成し、業績を持っている人の受け入れには消極的で、ましてFBIから嫌疑をかけられるような人物は好ましくなかった。セント・ジョルジイは解決策を見つけた。ケーブ・コッドのウッド・ホールにある海洋研究所のなかに私的な研究所を創設し、各種財団からの支援で彼の仕事や共同研究者の仕事を賄うことになった。ラーツ・イシュトヴァーンの

ような実業家の支援を受けて、自由な研究をおこなえることになった。

ウッド・ホールは次第にアメリカの情報頭脳センターになっていった。セント・ジョルジイはゾルターン・バイ、ジョン・フォン・ノイマン、ジョージ・ガモフ、ジェームズ・ワトソンなどを、しばしば家に招いた。彼の家は「七つの風」と呼ばれ、北風だけが防げるようになっていた。ワトソンはベストセラーになった *The Double Felix* の一部の箇所を、セント・ジョルジイ家のことを書いている。

ハンガリーからの訪問者はいつも歓迎された。筆者もアメリカの税関をかくくぐって持ち込んだパブリカを教授に持っていったことがある。教授はそれを大理石で造られた自身の胸像の上に、嬉しそうに振りかけたのを覚えている。スプートニク・ショック以後、ウ

ッド・ホールでは政府の肝いりで大規模な集中検討会が開かれるようになり、カールマンやヴェグナーを含め、多数のノーベル賞受賞者が定期的に集まるようになった。

「我々は罰を受けることなしに、水素爆弾を製造し、一八世紀のような利己主義的で偏狭で、感情的で欺瞞的な政治思考でこれを使わせる訳にはいかない。他の天体に向かつて宇宙船を飛ばしながら、地球上で人間が「フイートものコンクリートの壁を立てて暮らし合うなどというのは、まったく馬鹿げている。いつの時代にも、科学的な思考が安定した世界を造り上げてきた。しかし、人間存在の属性として悲惨の中で黙従していることを、科学は取り返しがつかないほどに傷つけたし、神や王や貴族の古いヒエラルヒーや、持つ者と持たざる者、裕福な者と飢

える者、先進と後進の古い秩序を根底から崩している」と、*Lost in the 20<sup>th</sup> Century* と題して出版された自伝のなかで述べている。彼はアメリカへの新参者であったが、スイラルドやテラーのようなスタイルで、世界を救おうとしたのだ。

### 科学する姿勢

「大胆に思考せよ。間違いを恐れるな。細かな所まで気を配れ。目を見開いておけ、目標以外のすべてに謙虚であれ」。セント・ジョルジイが英語で記した詩まがいのモットーのようなものだが、これが彼の行動指針を表現している。「マツチで一杯の箱を振っても、何も起こらないよね。でも、そこから何本か取りだし箱を振ると、マツチが動くのが分かる」。教授は「生命とは何か」という究極の問題を説明するのに、このような事例を使った。「生物学が僕にと

って魅力的なのは、その非常に繊細な所だ。反応のスピードとその繊細さがたまらない。DNAはほとんどの時間は不活動状態にある。たんぱく質が仕事をやる。しかし、たんぱく質の一つの分子だけでも、細胞の中では、物凄く高い活動エネルギーをもった巨大な身体のようなものだ。生命を理解するには、小さな単位がどのように動くのかを観察しなければならぬ。一九四〇年にセグドで出した論文で、たんぱく質は電子を誘導すると記した。化学的に隔離されているたんぱく質は白い。たんぱく質を赤くするためには、電子を放出してやらなければならぬ。だから、たんぱく質が誘導体だということが分かる。僕がリナス・ポーリングと通って出会った時に、彼は遠くから叫んでこう言うのだ。「たんぱく質は半導体じゃないぞ」、て。こ

僕は励まされるんだ。もし僕のアイデアが簡単に受け入れられたら、逆に僕は懐疑的になる。僕の発見は凄いいことじゃないんだとね」。

セント・ジョルジイの大胆さと、科学者の世界の批判的な反応が見えるようだ。非常に強いハンガリー訛りで、こう宣言したことがある。

「草と草を刈る人との間には、本質的な差異はない」と。こうだから、セント・ジョルジイは権威ある科学雑誌よりも単行本で自分のアイデアを出版することが多かった。彼は自分の研究プログラムをバイオ電子工学と呼んでいた。八歳になっても、ウィンドサーフィンと量子力学を学ぶのに必死だった。

「物事は若い時にしか頭に焼き付けることができないんだ。年を取るにつれ脳は凍結し、柔軟性を失ってしまう。僕自身がこれを体験している。僕が量子力学で仕事を始めたのは四代になってからで、原子を理解しようとは努力した。しかし、もう遅かった。頭脳にアイデアを積み込むことはできる。だが、それを血肉化できないのだ。だから、高校生と原子物理学の議論をするのは避けたい。彼らは頭の中だけでなく、身体で、原子を自分のものに行っているのだ」。

### 再びブダペストで

セント・ジョルジイ教授がハンガリーを訪れたのは一九七三年だった。科学アカデミーで公式の講演を終えて、筆者の物理学専攻の学生たちが教授を取り囲み、一緒に討論して欲しいと頼んだのだ。教授は快諾し、儀礼的なプログラムを中止して、ブ

ダペスト大学に来て、学生と討論することになった。斯くように大胆であった。生物学者より、物理学者の方が彼を良く理解できた。

一九七八年にハンガリーを再訪した時は、四番目の妻に母国を見せたということとで実現した。筆者に宛てた手紙はこうなっていた。

「親愛なる友人へ。

一九七八年六月一日

僕はリンダウの会議に参加するが、その後で僕の妻がハンガリーへ『お忍び』で訪問する。ブダペストを見

るためだ。君は僕の研究にかんする講演のことを書いていたが、エトヴォシユ物理協会で、あまり大騒ぎしないで、やって良い。八月五日には帰りたい。

草々

セント・ジョルジイ・アルベルト

追伸：僕の話は『生存状態』と題して良いものだ。インターコンチネンタル・ホテルに泊まる予定だ」。

ハンガリーでの最後の講演は、エトヴォシユ大学の原子物理学科で、教授は電子スピン共鳴の実験について講演した。生体のたんぱく質は奇数の電子を保有していることを示し、その意味で半導体なのだと言った。また、癌を理解したいという希望も表明した。

ハンガリー国営テレビを通して、ハンガリー国民にメッセージを送っている。

「私は過去も現在もハンガリー人です。ハンガリー人として、ハンガリーが『偉大な国』の仲間に入つて欲しいと思います。国の本当の偉大さは規模や軍事力に依るものではありません。国の政治的境界は、他人を傷つけることなくして、拡張することとはできません。しかし、知的生活では、成長は頭脳に依存しています。このような意味で、私はハンガリーが世界の偉大な国の一つになつて欲しいのです」。

彼の晩年は生命たんぱく質の研究で充実したものだ。もちろん、その大胆な持論が十分に評価されないという苦味はあつたが。その意味でも、彼の一生は異星人的な特性を如実に示している。つまり、豊富な歴史的経験を持ち、遠い未来のことに関心を持ち、着実ステップを踏むより直感に頼り、人類救済の努力が科学的研究を悩ますが、時にはそれが成功するというような特性である。

アルベルト・セント・ジョルジは百歳近くまで生きた。最後まで彼は楽観主義者だつた。二一世紀を信じ、若者を信じた。

彼は「狂った類人猿 (The Crazy Ape)」について、こう書いている。

「我々の世界は老人病だ。原子時代のはるか前に脳が凍結した人々によつて支配されている。老人支配というのは変化の速度が遅く、既存の価値を守ることが主要な課題になるような時代には良いシステムだろう。しかし、現代のように人類の生存が新しい世界への適応や創造の能力に依存している変化の速い時代には、老人支配はきわめて危険なものになる。今の親たちは宇宙時代以前に生まれた世代で、その子供たちは宇宙時代の世代なのだ。

今我々が迷い込んでいる崖っぶちへの道からどうやって抜け出すことができるのだろうか。若い世

代が新しい世界を造ることではない。科学によつて新しい世界を創り、それを恐怖のような感情的で時代遅れの原理で機能させることなど不可能だ。科学によつて創られた世界は、科学自体を創り上げた精神と科学的手法でしか、完全に機能させることはできないのだ」。

## 【日本人会よりお知らせ】

お蔭様で二千年度前半の日本人会行事を盛大に行う事ができました。

三月一二日 室内ゲーム大会：百人ほどの老若男女が麻雀・ゲーム・ダーツや福引大会に盛り上がりました。

五月一四日 第一回ソフトボール大会：チーム数が一チームに増え真剣勝負。子供達も昼休みに糠沢大使と楽しそうにゲームに励んでいました。

六月二一～二二日 巡回健康相談：過去最高百五十名の相談者が大使館・補習校・デンソーにて受診されました。

六月二五日 遠足：あいにくの雨

となりましたが、「ますの掴み取り」に子供達は(大人も)大興奮。また、予定になかった「美女の谷」にも寄って帰ってきました。

ご協力ありがとうございました。また、各ご担当の方々にもお礼申し上げます。

今後の予定は

九月一七日【大運動会】、

十月一日【第2回ソフトボール大会】(会場の都合で、九月初めに変更される場合もあります)

一二月九日【総会及び年末パーティー】です(追って逐次案内状をお送りします)。

猛暑の折、皆様お元気で楽しい夏をお過ごし下さい。

なお、誠に勝手ながら七月一五日～八月一五日まで日本人会事務所はお休みとさせて頂きます。  
(日本人会事務局 酒井由美子)

日本人会事務局連絡先

TEL/FAX: (36-1-356-5721)

e-mail: y-sakai@mail.matav.hu